

K. ヴァスマンスドルフ著『マルクス兄弟と羽剣士の6つの剣術興行』(1870)に関する一考察

A Study of „Sechs Fechtschulen der Mardbrüder und Federfechter“ (1870)
by K. Wassmannsdorff

体育学部体育学科

楠戸 一彦

KUSUDO, Kazuhiko

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

キーワード：ドイツ, 中世, 剣士団体, 剣術興行

はじめに

本稿は、19世紀後半のドイツの「体育史家」(Turnhistoriker)であるK.ヴァスマンスドルフ(1820-1906)の著作『マルクス兄弟と羽剣士の6つの剣術興行』(1870)¹⁾の一部を、邦訳によって紹介することを目的としている。

15世紀のドイツでは、貴族に剣術を教える「市民」身分の剣術師範が登場してきた。彼らは「マルクス兄弟団」(Marxbrüderschaft)と呼ばれる団体を結成し、1487年8月に神聖ローマ皇帝フリードリヒ3世より「特権状」(Privilegiumsbrief)を獲得した。この書状は、①「剣術興行」の開催、②剣術の教授、③「剣術師範」の呼称権を特権的に保証する内容であった²⁾。しかし、16世紀後半になると、マルクス兄弟団に所属しない剣術師範たちが剣術を教授し、剣術興行を開催するようになった。彼らは「羽の自由剣士団」(Freifechter von der Feder)と呼ばれ、1607年に神聖ローマ皇帝ルドルフ2世から、マルクス兄弟団と同様の特権を保証する「特権状」を獲得した。

このような剣士団体に関しては、19世紀以来さまざまな研究がなされている。例えば、アプト(1817)、J.シュミード=コヴァルツィーク/J.クファール(1894)、A.シェール(1901)、M.シューマン(1924)、H.ゲルバー(1936)、K.E.ロッホナー(1953)、P.マール(1961/62)、M.ヴィールシン(1965)、T.-H.ヒルズ(1985)、H.ボーデマー(2008)らが、皇帝による特権状、剣術師範の修業証書や師範証書、剣士団体による都市当局への剣術興行に関する請願状、剣士団体の規定や師範叙任などについて研究を行っている³⁾。特

に、K.ヴァスマンスドルフの研究は、19世紀後半の研究とは言え、マルクス兄弟団と羽剣士団の研究を行う場合の不可欠な先行研究である。しかしながら、彼の剣士団体に関する研究は、わが国ではこれまで十分に検討されてこなかった。そこで、本稿では1870年に出版された彼の著作『マルクス兄弟団と羽剣士の6つの剣術興行』の一部を邦訳によって紹介する。

ヴァスマンスドルフの著作は次のような構成をしている。

はじめに (V-Ⅶ頁)

序論 (1-11頁)

I. マルクス兄弟団と羽剣士団の剣術興行に関する史料 (12-31頁)：1) 1573年のツヴィッカウ (12-16頁)、2) 1575年のシュツットガルト (16-23頁)、3) 1583年のトロップハウ (24-26頁)、4) 1585年のデュッセルドルフ (26-29頁)、5) 1596年のシュツットガルト (30頁)、6) 1614年のドレスデン (30-31頁)

II. 1579年のニュルンベルクの剣術興行の詩 (32-45頁)

III. レーゼナーによる1589年の『名誉ある称号と剣術の賛歌』(46-58頁)

本稿では、紙面の関係から、「序論」(1-11頁)におけるマルクス兄弟団と羽剣士団に関する叙述(4-9頁)を訳出することにする。邦訳に当たっては、次のような修正を行った。

- 1) 原文のゲシュペルトは傍点とした。
- 2) 原文の„は「」とした。
- 3) []内の語句は訳者の挿入である。
- 4) 原文は各頁の脚注であるが、訳文では通し番号

とし、本文末にまとめた。

- 5) 「原注」は原著者による注であり、「訳者注」は訳者による注である。
- 6) 「Fechtschule」は、ヴァスマンスドルフの著作の表題に見られる「見せ物＝賞金剣術」(Schau= und Preisfechten)」に基づいて、「剣術興行」と訳出した。
- 7) 言語的な解説に関する脚注は省略した。

邦訳：K.ヴァスマンスドルフ著『マルクス兄弟団と羽剣士の6つの剣術興行』(1870)

皇帝フリードリッヒの特権証書は、「n⁴ 剣の師範」とだけ述べている。同様に、我々が先に見たように⁵⁾、アウグスブルクとシュツットガルトにおける見せ物剣術の報告は、マルクス兄弟と羽剣士というドイツの剣士の周知の区別については何も述べていない。これは、どのような事情なのであろうか。

剣術のさまざまな教え方は、既に、古人〔マルクス兄弟団〕への〔1487年の〕特権証書に先行する剣術筆稿に示されている。剣術に関するリヒテナウエルの術と指図は、既に－ゲルマン博物館の1389年の筆稿⁶⁾の中に存在している－剣による防御の構えに関する詩の中で、「卑怯な」防御の構え、つまりリヒテナウエルが承認していない以前の習慣的な構えである別の指導法による構えを前にして、次のように警告している：

卑怯な構えを逃れるために行うべき

4つの構えは

牛、鋤、柳の構え

そして天の構えである

リヒテナウエルの流派に属しているこのニュルンベルクの筆稿は、「leychmeister」(浅薄な剣術師範)を挙げて、次のように述べている。「彼らは新しい技を考案したと言う。しかし、私が目にするのは、リヒテナウエルの技から出たのではない技法と攻撃法を考案したという人々である。彼らは、彼らがつけた新しい名前の技法を観覧に供しようとしている。彼らは攻撃と防御の技を2回あるいは3回と行い、相当の防御と攻撃によって良い名声と称賛を得ようとしている。彼らは敵と相対し、さまざまな攻撃を行うとき、彼らはためらい、隙を見せる。というのは、彼らの剣術には節度がなく、真面目な剣術ではないからである」(Bl.14b)。

時代の流れの中でヨハネス・リーヒテナウエルによ

る古来の流派から離れてしまった剣士に関する確実な名称は、レックヒナーのメッサー＝剣術書における「自由剣士」という語に読み取ることができる：「自由に攻撃する」自由剣士 (Bl.21a)⁷⁾。「自由な剣術」の技が何であるかということについては、レックヒナーは何も述べてはいないが (Bl.102a)、自由剣士に対してはいわゆる後の先の技が慎重に適用される、という彼の注釈から明らかになる (Bl.26b)。自由剣士は「長剣の自由な攻撃とメッサーの正しい術を行うのではない。彼らは正しい技を知らない。彼らは名声のために相手の腹を攻撃し、隙を掴もうとする」。

フリードリッヒ3世によって〔1487年に〕剣の師範に最初に与えられた自由＝特権証書は、彼の後継者によって更新と承認がなされている。この証書によって保護された剣士団体は、(フランクフルト市文書館にある)最古の「師範名簿」に関する「報告」によれば、元々は「わが聖母マリアと聖マルクス兄弟団」[bruderschaft Vnnsrer lieben frawen der reynen Jungfrawen Marien vnd des Heiligen vnd gewaltsamen Hyemelfursten sanct Marxen]と呼ばれた。いわゆる羽剣士の団体は、皇帝ルドルフ2世によって1607年3月7日に初めて特権証書を得た。これら二つの剣士団体はいつ結成されたのであろうか。

アウグスブルクの参事会役人であるパウルス・ヘクトール・マイルは、現在ではドレスデンの図書館にある豪華本の「剣術書」を1542年頃作成した－本書の格闘の一部はアウエルスヴァルトの格闘術の再版 (Leipzig bei M.G. Priber, 1869) の中に見られる⁸⁾。マイルは羽剣士については未だ何も知らない。彼は本書の剣術の歴史において、「祖国の利益のために」役立ち、そこに究極の目的がある剣術について次のように述べている (序論, Bl.12b)。最後にこの「騎士的剣術がくる。聖マルクス兄弟団は、神聖ローマ皇帝フリードリッヒ3世、マクシミリアン、現在の国王であるカールから、特権と自由を与えられた。3人はオーストリアの尊敬すべき家系の生まれであり、この騎士的運動を決して衰亡させず、常に援助してくれた。そして、フランクフルトの恒例の秋市のときに、剣の師範は聖マルクス兄弟団の誓約し任命された師範によって、黄金の術の師範試験を受ける。こうして、彼らは騎士的剣術に属することを全て訓練したことを、誓約によって証明される。こうして、彼らは神聖ローマ帝国のドイツにおいて興行を開催し、正当な剣術を人々に教授することができるだろう」。

「羽剣士」という名称について、私は1574年よりも

早く挙げることはできない。マルクス兄弟と羽剣士との対置は、道化師ベネディクト・エデルベックによる1574年の『(1573年の)大射撃大会の公式記録』の中に見出される。私の知る限り、これが最初である。

フランクフルト文書館の文書類は、羽剣士の出現について1575年より以前のいかなる報告も含んではいない。自由帝国都市フランクフルトa.M.の参事会に対して、「フランクフルトa.M.の聖マルクス兄弟団の剣の師範」は、1575年9月6日に次のような請願を提出している：

「尊敬すべき親愛なる紳士様。聖マルクス兄弟団の剣の師範は、数年前にこの自由帝国都市フランクフルトで⁹⁾、公開の剣術興行を開催する特権を承認されました。しかし、この兄弟団の自由と恩寵が侵犯されていることを想起されるようお願いします。参事会におかれましては、自由剣士が剣術興行を開催することを許可せず、我々の従来の特権を保護してくださるようお願いいたします。この請願が認められれば、我々はいかなる場所でも、そのような悪弊に苦情を申し立て、特権¹⁰⁾における処罰が下さるよう求めはいたしません。この件、宜しく願ひいたします」。

翌年の「76年4月19日木曜日」という日付があるフランクフルト参事会への文書の中に読み取られるが、聖マルクス兄弟団の「ホーフのフリードリッヒ・レンナー、石工、現在の団長」と聖マルクス兄弟団の剣の師範4人が、同様の請願を提出している。この請願書の中から、師範の説明に付け加えられた次のような箇所が取り出される。誠実で正直な仲間、いかなる身分や手工業であろうと、「貴族と騎士から除外されたならば」、今までは兄弟団に入会することができた。

「しかし、数年前に（理由は分からないが）若干の者が我々から脱退し、今日なおもしばしば言われているように、自由剣士あるいは羽剣士と称している。彼らは高貴な身分の人々と結びついて、我々聖マルクス兄弟団に敵対している。彼らは（つい最近の枝の主日〔復活祭前の最後の日曜日〕にあったことであるが）公開の自由な剣術興行において脅し文句を並べ立て、その他にも至る所で我々に突っかかっている。特に（最も嘆かわしいことであるが）、我々の伝来の特権と我々の意志に反して、公開の興行を開催することが自由剣士に許可されることを、我々は見なければならなかった。それ故、我々はそうしたことが生じる数日前に、不遜とわがままからではなく、本当の証言に基づいて、このビラを取り除いた」。

「(自由=羽剣士)の出現と悪弊が取り除かれ、さら

に許されてはならない」という参事会の処置の2年後、今や最初に言われているように、「聖マルクス兄弟団の長剣の師範」は改めて参事会に対して、自由剣士と異国の剣士に興行を計画し挙げる事が無差別に許されている、と訴えねばならなかった。しかしながら、フランクフルト文書館の文書が証明しているように、マルクス兄弟の繰り返される抗議にも関わらず、後には「羽の剣術師範」に対してフランクフルトa.M.での興行挙行が許可されているように、「羽に愛着を持ち、血縁の剣術師範」あるいは文書の中で言われている「羽の自由剣士」は、1607年にプラハで皇帝ルドルフ2世から与えられた特権証書によって、マルクス兄弟だけが要求したのと同じような権利を得た。この時代以来、ドイツ帝国では、二つの公的に承認された剣士団体が存在した。

羽剣士に関してプラハ文書館が尚も所蔵している文書の中で最古の文書は、1597年7月29日にプラハの市長と参事会によって-バーメン語で-許可された剣術興行規定である。この規程では、羽剣士とマルクス(マルクス兄弟)は、プラハでの剣術興行の開催に関して同権と見なされている。

ここで、羽剣士という名称を最終的に正しく解釈しておこう。この名称は、作り話のように「羽」という剣術武器には由来しない、ということは既に「はじめに」で触れた通りである。

皇帝ルドルフ2世は、しばしば言及されるように、1607年3月7日にプラハで羽剣士に対して特権証書を与えた。皇帝はこの機会に、「羽の自由剣士の師範と団体」が1606年8月4日にプラハで承認していた規約を承認しただけでなく、「公的な剣術興行や名譽の為に必要な際に使用できる」ように貴族の紋章をも与えた。紋章の楯からは、紋章楯の真ん中まで雲の中から二人の男性の腕が飛び出ているのが見える。「手を結びあった二人の男性の腕は、先端が下に向かってペンを持っている」。もちろん、ペンは決して刺突=打撃武器ではない。さらに、羽剣士は「聖ファイトの日〔6月15日〕の後」の日曜日の最初の興行のために、1608年2月10日にプラハでマルクス兄弟に出された招待状に、皇帝によって与えられた印章を捺印した。この印章には次のような銘がある。「羽の長剣の師範の印」。これによって、羽剣士にとって特別な武器や技法を仮定することが、より一層拒否されることは明白である。

遠くまで国を見渡す聖ファイト=教会によって有名なプラハは、先に挙げた文書、つまり1597年のプラ

ハ参事会による剣士規定、1607年の皇帝の特権証書、1608年の聖ファイト＝日の後の日曜日に挙行される興行の訪問に対する招待状が示しているように、羽剣士の本拠地と見なされ、実際的にも常にそのように見なされている¹¹⁾。これに対して、ドイツ皇帝の戴冠式の都市であるフランクフルトは、皇帝によって与えられる特権証書の保管地と見なされ、マルクス兄弟の本拠地と見なされた。マルクス兄弟が使徒マルコ（マルクス）を守護聖に選んだのに対して、羽剣士の守護聖は全ての証拠が一致して述べているように聖ファイトであり、羽剣士という名称はファイテル＝剣士あるいはファイテル剣士以外の何物をも意味しない。

私は「羽剣士」という名称に関するこの説明を、フランクフルトa.M.の文書館にあるマルクス兄弟に関する文書の書類束Nr. 27から取り出す。「長剣の聖マルクス兄弟関連」という表題の下に、恐らく剣の師範の陳述そのものに従って次のことが報告されている：

「[マルクス兄弟団の師範に対して] 誓約した師範は、[マルクス兄弟団によって] 承認された師範になるまで、なお2年待たなければならない。

マルクス兄弟と羽剣士は、同じ訓練 [exercitia] を行う。マルクス兄弟は羽剣士を知っており、羽剣士はマルクス兄弟を知っている。マルクス兄弟はここ [フランクフルト] で師範になり、羽剣士はプラハで師範になる。彼らは羽剣士と呼ばれ、聖ファイトの日に特権を得た。ルカス兄弟は、マルクス兄弟あるいはファイト剣士出身の師範である。ルカス兄弟は、マルクス兄弟と羽剣士に対して興行の挙行を主張する。しかし、彼は血まみれにされる [試合で負ける] と、立ち去る。他の者は、観客からのお金を分配する」。

羽剣士たちには、マルクス剣士たちを模倣しながら、聖ファイトを彼らの守護聖とした。その後は、以下で述べられる [本文の32-45頁] 「ニュルンベルクの興行詩」と紋章のペンが証明しているように、そして私が入手した全ての資料が証明するのと全く同様に、言い換えと意味の変更によって、もはや聖ファイトと彼らの名称との関係は記憶されてはいない。それ故、ファイテル剣士の紋章におけるペンについてもはや何も知らない新しい作家が、「羽剣士」という詩の説明のために、歴史的な基礎に依拠しないような聖ファイトの剣士の本来の剣術技法を仮定するに至っているとき、それは何と驚くべきことであろうか。我々はあらゆる確信を持ってもう一度繰り返すが、聖ファイトの剣士はマルクス剣士と同じ武器を使っていた。両方の剣士団体は長短の武具の種類と形状に従って、

撃つことと切ることと同じく突くことを理解していた。従って、ドイツの剣術の歴史は、Gゲットリシグ＝シャイドラーによって持ち込まれたあらゆる仮説を放棄しなければならないだろう¹²⁾。

皇帝ルドルフは、1541年5月13日にレーゲンスブルクでカール4世によって「長剣の師範と聖マルクス兄弟団」に与えられた貴族の紋章証書を、ウイーンで1670年3月20日に保証し、更新し、内容を増大させた。その後、「長剣と軍事的な訓練術に経験のある聖マルコとレーヴェンベルグの師範」は、初めて「聖マルコとレーヴェンベルク」の団体と呼ばれる。彼らの紋章の翼のあるライオン [レーヴェン] は、その後ろ足で、紋章が示す背景の3つの山のうち2つの「山」に立っている。それ故、名称が「レーヴェンベルク」である。

ファイテル剣士あるいは羽剣士は、後には「羽の自由剣士団の上に立つグライフェンフェルズの長剣の師範」¹³⁾ と呼ばれる。皇帝ルドルフ2世がこの剣士たちに1607年に与えた紋章の中には、紋章動物として翼をもったグリフィンが紋章を抱く兜の上にいる。このことについては、この剣士ギルドもマルクス兄弟を模倣して紋章の増大を模索し、マルクス兄弟と全く同様に皇帝レオポルドから1688年12月2日に紋章の増大を得た、ということを書いておかなければならない¹⁴⁾。

おわりに

ヴァスマンスドルフ自身が副題で「マルクス兄弟と羽剣士の歴史に関する予備的研究」と述べている本書『マルクス兄弟と羽剣士の6つの剣術興行』の一部を、邦訳によって紹介した。19世紀後半のドイツにおける「史料実証主義」に基づく剣士団体に関するヴァスマンスドルフ研究からは、多くの史料の存在を知ることが可能である。しかし、マルクス兄弟団と羽剣士団の組織と運営、財政や活動、あるいは都市当局との関係など、数多くの問題が残されている。この意味では、ヴァスマンスドルフの「予備的研究」を一層前進させることが必要であろう。

注

1. Wassmannsdorff, Karl, Sechs Fechtschulen (d.i. Schau= und Preisfechten) der Marxbrüder und Federfechter aus den Jahren 1578 bis 1614; Nürnberger Fechtschulreime v. J. 1579 und Rösener's Gedicht: Ehrentitel und Lobspruch der

- Fechtkunst v.J. 1589. Eine Vorarbeit zu einer Geschichte der Marxbrüder und Federfechter. Heidelberg 1870.
2. 1487年の特権状については、次の拙稿における拙訳を参照されたい。ドイツ中世後期における「剣士ゲゼルシャフト (Fechtergesellschaft) の成立事情, 岸野雄三教授退官記念論集刊行会編, 岸野雄三教授退官記念論集 体育史の探求, 1982年, 19-38頁。ここでは, 30-31頁。この外, マルクス兄弟団に関する次の拙稿も参照されたい。「マルクス兄弟団」の規約と目的に関する一考察, 体育史研究, 2 (1985): 23-29。ドイツ中世スポーツ史史料-剣士団体「マルクス兄弟団の規約」, 山口大学教育学部研究論叢, 34 (1985) 3: 171-187。
 3. これらの文献に関しては、参考文献を参照されたい。
 4. [原注] この「n」は、周知のN.N. [nomen nescio] [某氏] と同様に、剣術師範の特定の名前の代わりである。
 5. [訳者注] 序論の2-3頁において、1509年のアウグスブルクと1560年のシュツットガルトでの公開射撃大会における「剣術興行」が述べられている。
 6. [訳者注] Liechtenauer, J., Fehthandschrift. Cod. ms. 3227a. In: Germanisches Museum in Nürnberg. 剣術師範ヨハン・リヒテナウエルによる剣術は、ドイツ語による最古の剣術筆稿といわれるハンコー・デープリンガーの1389年の筆稿の中に収められており、現在でもゲルマン博物館 (整理番号: Cod. ms. 3227a) が所蔵している。リヒテナウエルの剣術技法については、次の拙稿を参照されたい。ドイツ中世後期の剣術-J.リヒテナウエルにおける剣術技法の分析-, 渡邊一郎教授退官記念会編, 日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集, 島津書房, 1983, 609-630頁。
 7. [訳者注] Lecküchner, Johann, Fehthandschrift. Cod. Pal. Ger. 430. In: Universitätsbibliothek Heidelberg. H.-P.ヒルズとM.ヴィールシンによれば、この筆稿は1478年に作成された。Hils, H.-P., Meister Johann Liechtenauers Kunst des langen Schwerts. Frankfurt a.M./Bern/New York. 1985 S. 69-70; Wierschin, M., Meister Johann Liechtenauers Kunst des Fechtens. München 1965, S.23-24.
 8. [訳者注] Mair, P. H., Kunstfechtbuch. Mscr. Dresd. C 93/94. In: Sächsische Landesbibliothek in Dresden. Die Ringer=Kunst des Fabian von Auerswald, erneuert von G.A. Schmidt Turnlehrer zu Leipzig, mit einer Einleitung von Dr. K. Wassmannsdorff in Heidelberg, Leipzig 1869.
 9. [原注] フランクフルトa.M.において「長い」剣の師範に叙任されたマルクス兄弟という (フランクフルト文書館における) 目録は、1583年に初めて始まる。上述の証書の「師範」が兄弟団の団長を意味しないのかどうか、フランクフルトに「定住する師範」を意味するのかどうか、不明である。
 10. [原注] 1487年のフリードリッヒ3世の特権証書に記載されている。
 11. [原注] Frisch [F. L.] の『Teutsch=lateinisches Wörterbuch』(Berlin 1741) は、Federfechter [羽剣士] を簡単にPugies Pragenses [プラハの短剣] と訳している。
 12. [原注] ゲットリング=シャイドラーの言う「羽」という武器、つまり打撃のため、特に刺突のためのもっと軽いデッゲンが、Hendel [C. H.] の『Archiv für D[eutsche] Schützengesellschaften』(Halle 1802, I, S.106) から取り出されているのかどうか、不明である。ヘンデルは次のように述べている。「(バーメン語の) デュゼック[Dusäck], あるいはより良くテゼック[Tesäk]。この道具はドイツ人には羽と呼ばれた。それ故、これを利用する人々は羽剣士と呼ばれた」。いかなる史料においても、いかなる辞書と剣術書においても、「羽」という武器は登場してこない。この武器は、羽剣士という名称を説明するためにだけ、考案されている。
 13. [原注] これについては、D. Gottfr. Rud. Pommers al Bugenhagen の『Sammlungen histor[ischer] und geogr[aphischer] Merkwürdigkeiten, nach des Verfassers Tode aus seiner zum Druck völlig fertig gemachten Handschrift herausg[egeben] von Kästnern』(Altenburg [Richter] 1752, S.184.) を参照されたい。ブーゲンハーゲンは1688年に生まれ、1749年2月14日に死去した。彼の叢書は既に一度1726年に出版されたがそこでは証拠の例示はない。Jahn [F. L.] の『Deutsche Turnkunst』(Berlin 1816, S.278 f.) も参照されたい。
 14. [原注] 雑誌『Ost und West』(1848) の119頁を参照。レポルドの紋章証書は、私が利用したときにはプラハの文書館には存在しなかった。

参考文献

- 楠戸一彦 (1982), ドイツ中世後期における「剣士ゲゼルシャフト (Fechtergesellschaft) の成立事情, 岸野雄三教授退官記念論集刊行会編, 岸野雄三教授退官記念論集 体育史の探求, pp.19-38。
- 楠戸一彦 (1983), ドイツ中世後期の剣術-J.リヒテナウエルにおける剣術技法の分析-, 渡邊一郎教授退官記念会編, 日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集, 鳥津書房, 609-630頁。
- 楠戸一彦 (1985), 「マルクス兄弟団」の規約と目的に関する一考察, 体育史研究, 2, pp.23-29。
- 楠戸一彦 (1985), ドイツ中世スポーツ史史料-剣士団体「マルクス兄弟団の規約」, 山口大学教育学部研究論叢, 34 (3), pp.171-187。
- Die Ringer=Kunst des Fabian von Auerswald (1869), erneuert von G.A. Schmidt Turnlehrer zu Leipzig, mit einer Einleitung von Dr. K. Wassmannsdorff in Heidelberg. Leipzig.
- Abt (1817), Ueber Fechterspiele und Fechtschulen in Deutschland. In: Büsching, J.B. (Hg), Wöchentliche Nachrichten. Bd.III. Breslau, S.305-336.
- Bodemer, T. (2008), Das Fechtbuch Untersuchungen zur Entwicklungsgeschichte der bildkünstlerischen Darstellung der Fechtkunst in den Fechtbüchern des mediterranen und westeuropaischen Raumes vom Mittelalter bis Ende des 18. Jahrhunderts. Phil. Diss. Stuttgart. 2008. (<http://elib.uni-stuttgart.de/opus/volltexte/2008/3604/pdf/Fechtbuch.pdf>)
- Gerber, H. (1936), Die Reichsstadt Frankfurt am Main als Vorort der Marxbrüder oder Meister vom langen Schwrt. Frankfurter Wochenschau. 4, S. 8-11.
- Hils, H.-P. (1985), Meister Johann Liechtenauers Kunst des langen Schwerts. Frankfurt a.M./Bern/New York.
- Lecküchner, J., Fechthandschrift. Cod. Pal. Ger. 430. In: Universitätsbibliothek Heidelberg.
- Lochner, K.E. (1953), Die Entwicklung der europäischen Fechtkunst. Wien.
- Maar, P. (1961/62), Anfang, Blütezeit und Verfall der Fechtkunst in Nürnberg vom 14. bis zum 19. Jahrhundert. Diplomaarbeit an der Sporthochschule Köln. Köln.
- Mair, P. H., Kunstfechtbuch. Mscr. Dresd. C 93/94. In:

Sächsische Landesbibliothek in Dresden.

- Schaer, A. (1901), Die altdeutschen Fechter und Spielleute. Phill. Diss. Strassburg.
- Schmied=Kowalzik, J. und H. Kufahl, (1894), Fechtbüchlein. Leipzig.
- Schumann, M. (1924), Die Pflege der Leibesübungen im Bürgertum des 16. Jahrhunderts. Phill. Diss. Leipzig.
- Wassmannsdorff, K. (1870), Sechs Fechtschulen (d.i. Schau= und Preisfechten) der Marxbrüder und Federfechter aus den Jahren 1578 bis 1614; Nürnberger Fechtschulreime v. J. 1579 und Rösener's Gedicht: Ehrentitel und Lobspruch der Fechtkunst v.J. 1589. Eine Vorarbeit zu einer Geschichte der Marxbrüder und Federfechter. Heidelberg.
- Wierschin, M. (1965), Meister Johann Liechtenauers Kunst des Fechtens. München.

(本稿は、科学研究費「平成25年度(2013年度)基盤研究(C)(一般)」(研究題目:ドイツ中世後期の剣士団体「マルクス兄弟団」に関する研究, 課題番号:25350764)による研究成果の一つである。)